

きよすじょうかまち

清洲城下町遺跡(本発掘調査B)

所在地 清須市清洲地内

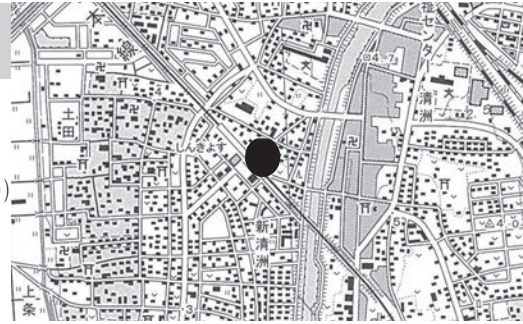
(北緯35度12分59秒 東経136度50分10秒)

調査理由 名鉄新清洲駅付近鉄道高架事業の本線工事・仮線工事(側道工事あり)

調査期間 令和5年9月～令和6年1月

調査面積 753㎡

担当者 永井宏幸



調査地点(1/2.5万「清洲」)

調査の経過 調査は名鉄新清洲駅付近鉄道高架事業の本線工事・仮線工事(側道工事あり)に伴う事前調査として、愛知県建設局道路建設課(尾張建設事務所)より愛知県民文化局を通じた委託事業として実施した。調査期間は令和5年9月～令和6年1月であり、調査面積は753㎡である。

立地と環境 遺跡は清須市の中央、清洲公園周辺に所在した清須城を中心に五条川沿いに広がる。今回の調査区は23A区と23B区を設定した。いずれも現況で標高3m前後、五条川沿いの沖積低地に立地する。23A区は名鉄新清洲駅東口近くに位置し、23B区は23A区から名鉄名古屋本線沿いに名古屋方面へ約400m進んだところに位置する。

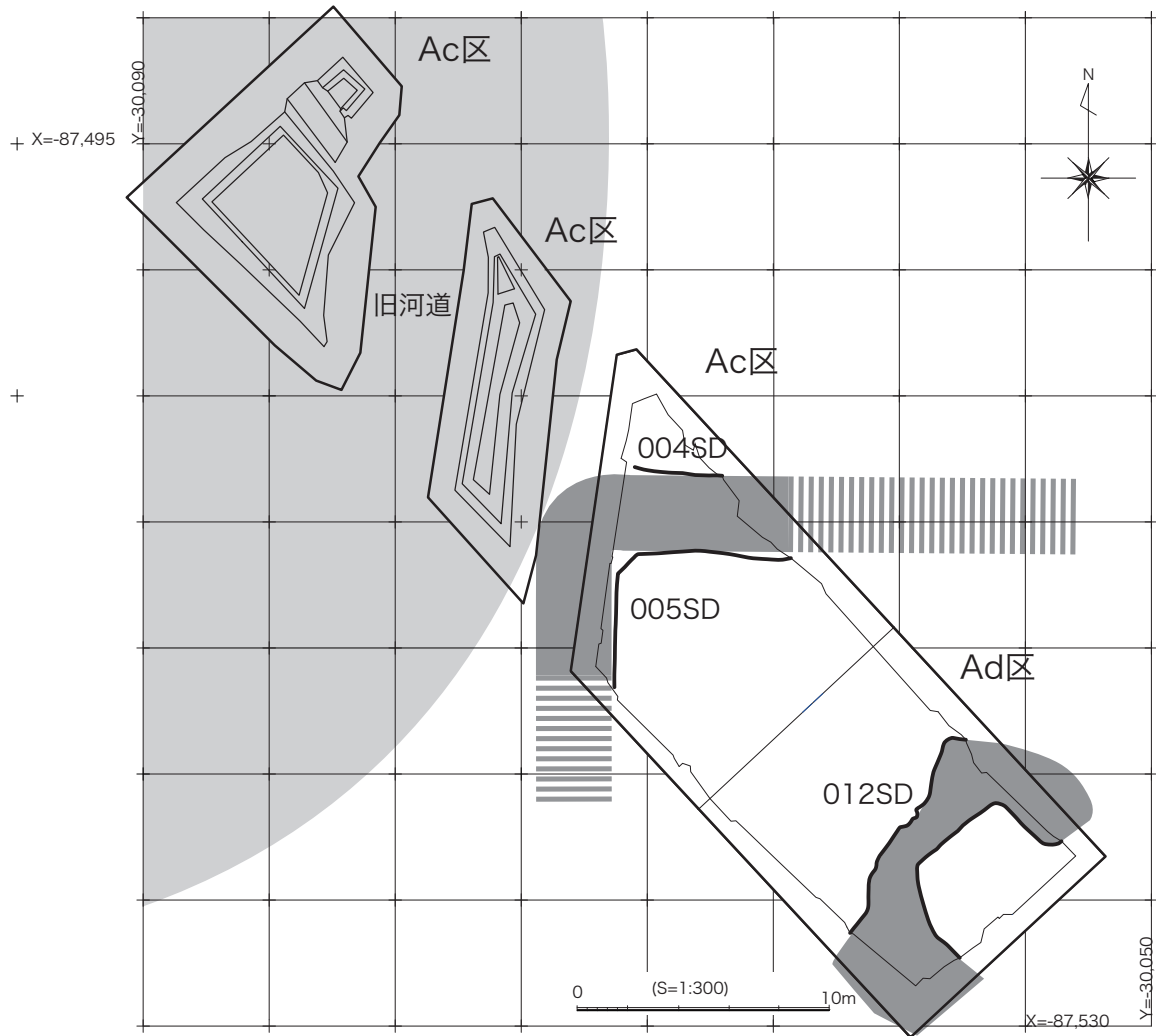
調査の概要 23A区はaからd区に4分割して行った。このうち西寄りの23Aa区と23Ab区は中世から近世の遺物が出土したものの、調査区内は河川堆積が続き、遺構は確認でなかった。今回の調査区北西の名鉄新清洲駅付近にかつて溜池があったことと、23Ab区より西側は旧地形が北西側に低く傾斜していることから、近世以前は自然流路が南北方向に流れていたと思われる。

23Ac・d区は北東側で清須市による発掘調査が進められていたことから、戦国から近世初頭を中心とする後期城下町期の遺構が展開すると予想された。ところが調査区の上位は大きく削平されており、旧地表面はすでになかった。したがって、深く掘り込まれた遺構のみが残存していた。Ac区では方位に軸線を合わせた004SDと005SDを確認した。当初は別遺構として認識していたが、交差する箇所にトレンチを入れ、層序を確認した結果、同一層序が続くと判明した。004SDは東西軸、005SDは南北軸に延びる。この溝は断面観察から2回掘削されていることが確認できた。規模は現況で004SDが幅2.5m前後、深さ0.8mを測る。出土遺物は004SDの最下層付近から土師器茶釜、天目茶碗、志野皿などがまとまって出土した。004SDは東へ続くと予測でき、さらに清須市の調査区では方向と規模が同一の溝があり、接続すると推定される。したがって、004SD・005SDは武家屋敷など規模の大きい区画溝であろう。23Ad区ではコの字状に屈曲する溝を確認した。周辺に攪乱が多く点在して面的に検出できなかった。各所でトレンチを入れて底面を確認しながら進めると不定形ではあるものの、溝底がコの字状につながった。溝の規模は現況で上位の幅3～4m、底面の幅1m前後、深さ65cm前後を測る。平面形は内法が約5mの正方形、外法が不定形を呈する。出土遺物は少ないが、溝底付近から土師器皿、陶器類が出土し、Ac区004SDと同時期に相当する。

B区はaからc区の3分割して行った。調査区は県道127号(清須新川線)が南北方向へ延びる西側に位置する。現状は県道沿いに宅地が立ち並ぶ。現況地表面から約1.5m下に近代以降の水田が確認された。この水田造成時に戦国から近世初期の遺構面は削平

を受けていた。上位は削平を受けていたものの、井戸をはじめ溝や土坑など方位の軸線あるいは美濃路に規制された遺構群を確認した。Ba 区の井戸 026SE は結桶の井戸側が残存していた。これらの遺構はいずれも後期城下町期に相当し、街道沿いに展開した町屋の一角と思われる。

(永井宏幸)



23A 区全体図



23Ac 区より西を望む (東から)



23Ba 区井戸 026SE 井戸側出土状況 (北西から)